

阪神大震災 その後

図書室の復旧

— 社会保険神戸中央病院と神戸労災病院 —

社会保険神戸中央病院 図書室の復旧

浜田 みちよ

1. はじめに

今回遭遇した阪神大震災は、わずか20秒の間に今までの生活を一変させた。職場においてもきのうまでの日常業務が全くできなくなってしまった。我々がそこからどのように図書室を復活させたか、今後の参考になればと思い報告する。

2. 被害の状況

前回の報告と重なるが、当院は神戸市北区、六甲山系の裏側に位置し、地上7階地下2階で市街地と比べれば比較的被害は少なかった。しかし、図書室は7階にあったため揺れがひどく、当初は足の踏み場もない書籍の散乱で、どこから手を着けたらよいかわからないほどであった。当室は病歴室も兼ねているのでまず可及的の必要に迫られてやはり散乱した16000冊のカルテの復旧に時間を取らざるを得なかった。ようやく図書室にとりかかったのは4月に入ってからであった。

3. 製本雑誌書庫の復旧

別室にある製本雑誌を収納したスチール棚は見事に【将棋倒し】になっていた。当時業務をストップしていた健診センターから7、

8人の男性の応援を得て、散乱した雑誌を和洋に分け廊下に山のように高く積み上げた。中途半端に引っかかっている雑誌は少しのはずみで上から落ちてくる。製本の「角」は凶器にもなるのである。製本雑誌は約4500冊、外に運び出すだけでもまる2日かかった。

書架の修理は5月初めに終わったが、再収納は5月27日の病図協の応援を待たなければならなかった。何しろ、一人二人でできる量ではなく、他の部署は市街地からのあふれるような患者さんの対応に追われ、また建物の応急修理、それまでにストップしていた山積みの業務をこなすのに精一杯で、とても図書室にまで手が回る状態ではなかった。

5月27日、当日ボランティアの皆さんは遠く大阪や京都から寸断された電車に乗り、車に乗り継いで、渋滞の中裏六甲の「僻地」にある当院にたどり着かれた。朝早く出発されたとのことであるが、到着は午前11時半頃であった。それまでに、こちらでは埃を被った書架を拭き、所蔵雑誌リストを打ち出し、受入年からの大体の冊数を割り出して、棚にタイトル名を仮留めしていった。人数がそろった昼前に作業開始、途中の休憩を含めて完了したのは午後6時前であった。

作業には台車とブクトラックを使用した。搬出に2日かかったことを考えるととても1日ではできないと思い、巻号を揃えないままとりあえずタイトル順に並べていった。とにかく書架に入れてしまえば閲覧できると思ったからである。しかし、この量を8人で、しかも半日の間に片づけてしまったのはさす

が皆さん「プロ」である。

当医学資料室は将来できる管理棟に移転予定であったため、書架を壁に固定することができなかった。そのために被害を大きくしたと思われるが、書架同士上部をつなぎ合わせておくだけでも被害を少なくできたのではないかと思う。また、所蔵雑誌の各タイトルごとの総数がきちんと把握できていなかったために棚に割り当てる時、はみ出した箇所と空いた箇所ができてしまった。さらに、廊下の両側に3重に雑誌を仮置きしたのも、再収納する際、手間取った原因であった。

4. 図書室の復旧

図書室は木製の書架こそ倒れていなかったが、下部に本が挟まれ位置ずれを起こしていた。とりあえず破損のひどい雑誌架を施設課の男性の応援で廊下に運び出した。書籍は書架の入れ替えが済むまでそのままにしておいた。

木製書架の入れ替えは大幅に遅れ、6月1日に納入された。NLMC分類で打ち出した項目をおおまかに書架に張り付け、廊下に出してあった書籍の山を「アリさん」のように少しずつ配架していった。新しい書架の選定は業者に任せたのだが、「同じタイプのものが製造中止になっているが、このタイプのものなら幅が同じなのでぴったり納まります」と言ったはずの書架なのに棚の高さが足りず、A4版の大系本などはカバーの箱を捨てざるを得なかった。上4段は移動棚であったが、余裕を持たせて納めると中途半端な空間ができるため諦めた。8月現在まだ完全に整理し終えていない状態である。

5. 終わりに

病院全体の被害が少なかったためか、図書室のある7階の状態が足を踏み入れなければ想像できなかったのか、職員の中でも人的協力や理解があまりなかったのは悲しかった。それだけに、来るだけでも大変だったのに遠くから応援に駆けつけてくださった病図協の

皆さんには本当に感謝の気持ちでいっぱいである。

今回の体験でネットワークの重要性、日頃の図書整理の大切さがよく分かった。しばらくの間相互貸借業務ができなくてご迷惑をおかけしたがようやく再開できるようになった。これまで以上に助け合いの精神で病図協の発展に少しでもお役に立ちたいと思う。

神戸労災病院 図書室の復旧

井川 美幸

1. はじめに

誰もが1月17日の阪神大震災を現実のものと信じられないでいた。ただただこの天災の前に無力感と恐怖感に打ちのめされ、夢を見ている錯覚にとらわれたまま、何が起こったのか理解できないでいた。

私はその時2階で眠っていたのだが、地震のあとしばらくしてようやく起きあがることができた。1階に降りていくと家の中は足の踏み場もないほど散乱していた。それから数日間は水の確保と食料の確保に奔走する。病院のことが心配で仕事に行こうとするが、ライフラインが絶たれ待機するしかなかった。JRがようやく須磨まで運行したので病院に出勤した。須磨から病院まで3時間の道のりを歩いて行った。病院は全体が緊迫した雰囲気、誰もが自分ができる役割を探して働いている。マスコミの報道では見えなかった状態を知り、早く駆けつけることができなかったことが悔やまれた。そこからは家に帰ることもできずに3週間病院の寮で過ごすことになった。

2. 図書室の復旧

図書室の状況とは言えば、本棚が薙ぎ倒されすべての本と雑誌が室内に散乱している

いう惨状で、一気に無力感に襲われた。一人ではどうすることもできない状態で落ち着いてから取り組みを考えようと思った。震災後約1ヵ月を過ぎる頃に病院でも水が出るようになり、ライフラインも少しづつ復旧して落ち着きを取り戻してきた。その時になって職員の方から図書室の整理について声が上がって行動を開始した。復旧作業の5段階は次のとおりである。

第1段階

2日間かけて散乱している単行書の整理をした。和洋別に分けて段ボールに詰め別室に運ぶ。別室に運ぶ作業は引越し業者に依頼した。段ボールは約600個で、部屋いっぱいになり入りきらない分は廊下に並べるしかなかった。

第2段階

本棚の解体と購入で、最初は移動書架の購入希望を出したが、予算不足で従来のような固定書架を購入した。ここで1ヵ月近く時間がかかった。

第3段階

本の搬入と整理。一人では無理な量を前に途方に暮れていたとき、社会保険神戸中央病院の林さんから協議会に応援を依頼してみたらどうかとのアドバイスを受けた。早速協議会の方に連絡をとったところ快い返事を頂いた。そして、国立京都病院の小田中さん、京都南病院の山室さん、淀川キリスト教病院の山崎さん、京都市立病院の重富さん、兵庫県立尼崎病院の熊井さん、国立姫路病院の田中さんの6名の方が5月28日、日曜日にもかかわらず遠方より来てくださった。「何でも言ってください」との一言に心は大いに揺れ、常日頃から悩んでいた単行書の分類整理をしていただくことにした。以前はNDCによる分類をしていたが、これでは煩雑になり利用しにくい点があった。NLMCに変更したいと思っていたのだが、機会に恵まれず諦めていた。この地震で分類変更の機会を得ることができ山のように積まれている段ボールを開けてはベテランの皆さんが手分けをして分類

してくださったおかげで念願のNLMCに変更できた。利用者からも利用しやすくなったとの声が聞かれ、またNLMCに変えることで購入に偏りのあることが分かって次の購入の際の参考にもなった。

一日が終わる頃にはやっと図書室らしい体裁が整い、単行書の整理が一段落したことで次の段階に進むめどがついた。

第4段階

製本雑誌の整理。とにかくスペースがないため、この際廃棄を考えることに決め、図書室の前に廃棄対象の本を陳列、各部長や図書委員と相談して保管するもの、廃棄するものの選別をした。その結果 Excerpta Medica と70年代までの製本を一部保管本を残して廃棄した。

第5段階

製本雑誌と単行書が一応書架に納まったので、第5段階として半年以上たまっていた雑誌の整理と製本雑誌の年代別並べ替え、94年の雑誌の製本、新着単行書の整理等。この他にも数え上げればきりがなほほど仕事があり、いまだにできていないことも多く利用者には不便をかけている。

3. これからの図書室

図書室は所蔵している本を閲覧するだけでなく、情報をいち速くキャッチし利用者に使ってもらうための施設である。しかし、これがなかなか理想どおりには捗らない。当院は来年早々に増改築が予定されているが、図書室に投資できる予算は今まで以上は組めないのが現状である。その上、まだ決定には至っていないが図書室の縮小が計られているようで、拡大ならまだしも規模の縮小となると今まで以上にサービス面でのレベル向上と質の高さが問われるようになると考えられる。しかし、残念なことに大半の人には図書館の重要性を理解してもらえずにいる。

この5年間図書室の仕事に携わってきたが、振り返ってみると5年前の図書委員会の発足に始まり現在のCD-ROM導入にまで至っ

た。次に取り組まなければならないのは職員の意識向上で、それに向けていま山積している問題の解決に力を注がなければならないと考えている。そのためには病院図書室の持つ意味を司書だけが知るのではなく、まず職場で多くの人たちと対話を持ち理解の輪を広げることが必要である。一部の人たちだけの図書室ではなく多くの人の自己研鑽の場所に変えていきたい。急速に進歩する医療現場にお

いて求められる情報にいち速く対応できる環境を作り上げ、資質の向上に努めたい。

最後になりましたが、この度の震災ではたくさんの方にご心配をおかけしました。勉強会のたびに、また電話等で皆さんより激励のお言葉をいただき心強く前進することができました。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。図書室の復興に負けじとがんばっていきます。

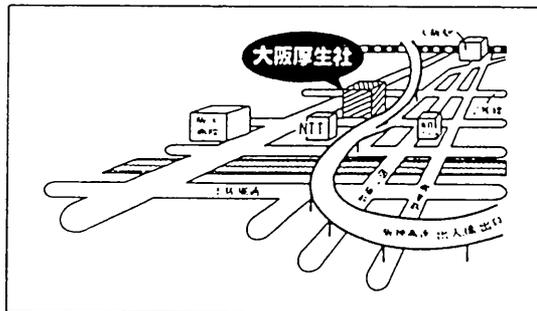
 **KOSEISHA**

Since 1946

■鮮度のいい情報を大量にストック
メデイカル情報発信基地!

月刊**医学情報** 医学関連記事を全国21紙より抜粋(年間購読料22,000円)

- TOKYO
 □ (03) 3294-0021
- YOKOHAMA
 □ (045) 243-0181
- KANAZAWA
 □ (0762) 64-0791
- SHIGA-DAI
 □ (0775) 48-2091
- TOYOAKE
 □ (0562) 93-1821
- KYOTO
 □ (075) 761-2181
- MORIGUCHI
 □ (06) 992-1051
- TAKATSUKI
 □ (0726) 83-1161
- KINDAI
 □ (0723) 66-0221
- WAKAYAMA
 □ (0734) 33-4751



株式会社**厚生社** 本社 〒530 大阪市北区堂島3-2-7 ☎(06)451-3711 Fax.(06)452-5080